



よい調査活動と会報づくり

日本白鳥の会会長 家 田 三 郎

1. 6月にあった総会を会長の考えで9月に開いたことに批判があり、この次からやはり6月に開くことにきまった。
2. およその会や雑誌の発行は、3回位になるとおかしくなる、そういう考え方が出た。
3. 会長は、そういう考え方をくみとってこの会の解消を理事会で提案した。この会の性格は各渡来地の連絡協議会的なものでよく、そうすれば会則も不要、会長も役員も不要、もしその都度、会を開く必要があれば、誰かが幹事となって、集れる人だけで集り、楽しく話しあって別れる。もちろん、金のかかる会報も不要。
4. しかし、この提案は不可ということになった。折角の会だから、なんとかして続けよう。
5. 会報をうまく編集して、ミリキ多きものにすれば、会員にならなくても買ってくれる人が多くなるう。大体、会長の文章など載せるから、売り物にならない。
6. 出来得る限り、儉約をして運営せよ。
7. 会報には、よい論文をのせ、連絡事項を添える。
8. ハクチョウ・ガン等の水禽の月別定時定点観測は続ける。年1回の環境庁の調査もあるが、日本白鳥の会の調査は本格的で大きい意味がある。環境庁鳥獣保護課長補佐がそんなことを述べられた。
9. 今後のこの会の事業は、よい会報作りとよい調査だけでよい。
10. この意味で50年度の予算がきまり、会長・事務局も現在のまま再任してもらえない。そう総会できまった。

*

以上のようなことで、50年度は出発することになった。北海道・島根県など会場の東京から遠い方々の負担は大きい、年に1度集って、話し合うことも楽しいということであろうか。

*

事務所は、おばばと青年の2人きりながら、要すれば死を賭すこともありそうである。

*

IWRB(国際水禽調査局)総会参加への会員の応援に対する阿部理事の感謝。逆にわれわれからの阿部理事の負担の大きさに対して感謝。今後、国際水禽調査局の性格を知ることが急務となった。

林会員によるソ連からのメッセージの紹介。ソ連との連絡は今後も松井新副会長が努力することになった。松井氏の写真集「日本の白鳥」が11月に出版されることも紹介された。